

生きる意味
生きるから

幼い頃に口伝えて 教えられたこと

第6回

花園大学

はし もと かず あき
橋本和明



る。もっと効率よく、しかも流暢に唱えられる方法はないものか。そこで考えたのが、インターネットで般若心経を唱えている音声データをダウンロードし、それをパソコン上で何度も流し、自分もそれに合わせて発声することであった。これはなかなかいい方法であった。こうして試行錯誤の末、ようやく今はほぼ間違なく唱えることができる。本当に長い道のりであった。

このことをおつき合いをしている幾人かの僧侶に話し、「あなたは般若心経を何歳の時に、どれぐらいの日数をかけて覚えたか?」と聞いてみた。すると、ほとんどの人が小学校の低学年の頃とか、それよりももう

と前の非常に幼い頃に覚えたと言う。しかも「その気になつてからは三日で覚えた」とか、実際に短時間にであつた。私のように、時間がかかつた例は一人もない。

考えてみると、僧侶の多くはお寺に生まれ、生活のなかに般若心経を覚える環境が用意されている。住職あるいは檀家の方が唱えるのを何気なく聞いており、音の響きやリズムが自然と身に染みついていくのであるう。

幼き僧侶はお経の文字は読めなくとも、あるいはお経の意味はわからなくとも、親から口伝えて教えてもらう。実はここに般若心経の神髄が隠れているのではないかと私には思えてならない。

昔はインターネットはもちろんのこと、ゲームやテレビもなかった。今からは想像もできないが、本さえも普及していない時代がつい百年前にはあった。その頃に、子どもはいろんなことを人を介して教わった。昔話やわらべ唄などはまさに親から口伝えで教わった代表である。

幼い頃に口伝えで教えられ身につけたことは、本を読んだりテレビで観たりする記憶とは質的にずいぶん違う。寝る前に母親が添い寝をして語ってくれた昔話が今でも脳裏に息づいていたり、わらべ唄が思わず口から出てくる時、昔の情景がよみがえってきたりする。そこには伝える人と受け取る人の情が

自ずと流れている。

そう考えると、われわれ現代人は次世代の人たちにどれほど口伝えをしているのだろうか。子育てのあり方を一つ取り上げても、若い親は子守歌など歌つたことがないという人がほとんどである。忙しさにかまけて子守歌どころか、テレビを添い寝の代役にさせている。子守歌を歌わない別の理由を聞くと、「うねんねんころりよ、おころりよ」と、「ふねんねんころりよ、おころりよ」

と歌われながらあやされた経験がないとのことであった。子守歌をどのような場面で、どのような動作とともに口にしたらしいのかが皆目見当がつかないらしい。究極的には子どもが寝さえすれば、そのプロセスはさほ

ど重視をしないというのが現代の子育てになつているのだろうか。これと似たことが至るところに散見される。おっぱいを与えている授乳中の母親の視線の先には抱っこをしている赤ちゃんではなく、片手に持った携帯メールがあつたりする。赤ちゃんにとつてはこの授乳は母親との重要なコミュニケーションの役割もあるし、食事だけではなく、母親との大切な遊びの場面もあるが、赤ちゃんの空腹さえ満たされればよいといったことなのかもしれない。

幼い頃に口伝えで教わったことは、おそらくその人の体のどこかにしまい込まれ、その後の学習の土台ともなっていく。そこには教わったことの最もしねり。

わり身につけたことを媒介にした伝えた人と受け取った人の関係性が深く刻み込まれている。僧侶が般若心経を唱える姿を見ていて、またまた私は勝手な妄想をすることがある。この僧侶はこのお経をどのように口伝えられたのだろうかと。あるいは、その時の幼き頃の情景や教えられた人との関係をこのお経によつてどう思い出すのだろうかと。般若心経はその意味でも伝える人と受け取る人の情が流れる最高のお経だと思える。

橋本和明
大学を卒業後、二十年以上も家庭裁判所で調査官として勤務し、少年事件や家事事件などの非行や虐待などの臨床に携わってきた。二〇〇六年から花園大学に奉職。臨床心理士。